

在庫循環からみる景気の局面

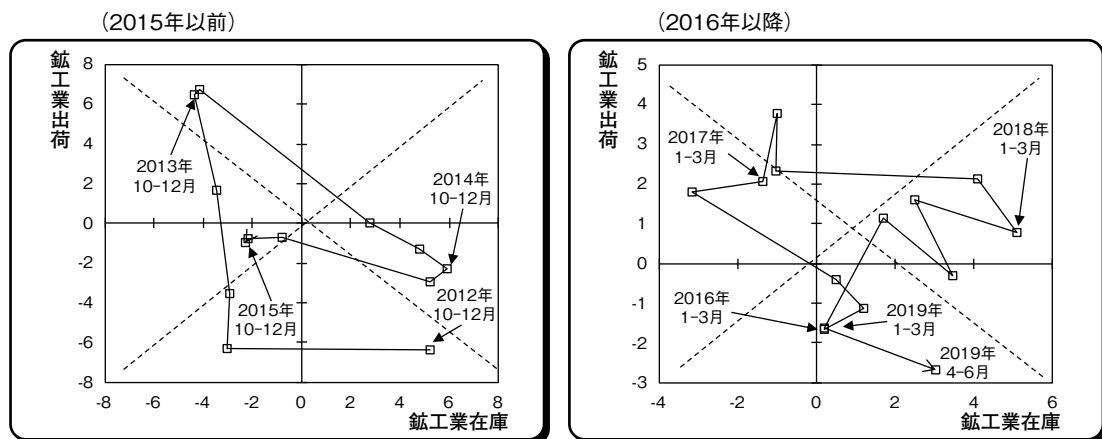
景気動向指数研究会（内閣府経済社会総合研究所）によれば、わが国の戦後の景気循環は2012年12月までに15回あったと判定されており、その期間は平均して52か月となる。2012年12月を「景気の谷」とする戦後16番目の景気循環（拡張期間）については、2019年9月時点でまだ「景気の山」は判定されていない。

ところで、景気には短期から長期まで様々な循環過程があることが知られている。景気循環については多くの研究がなされてきており、有名なものでは短期のキチン循環、中期のジュグラー循環、そして長期のコンドラチェフ循環がある。キチン循環は在庫の変動による景気循環で、その周期は4年程度といわれている。ジュグラー循環は主に設備投資の変動による景気循環で、10年程度の中期循環である。コンドラチェフ循環は50年程度の長期の変動で、シュンペーターはその要因として技術革新があると指摘した。なお、中期のジュグラー循環と長期のコンドラチェフ循環の間には、主に建設需要に起因する20年程度の中長期の循環があり、クズネツ循環と呼ばれている。

短期の循環についてやや詳しくみると、4つの局面に分けられる。①出荷が増加し在庫を積み増す局面、②出荷が頭打ちとなり在庫が積み上がる局面、③出荷が減少し在庫を減少させる局面、④出荷が回復し在庫が減少する局面、の4局面である。なお、③はいわゆる在庫調整局面であり、④は出荷増に生産が追い付かず結果的に在庫が減少する、意図せざる在庫減の局面である。

戦後の15回の景気循環は短期の循環といえるが、第16循環（拡張期間）をみると、景気後退とは判定されなかったが消費税増税などを背景にやや停滞した時期があり、2016年頃をはさんで在庫の循環が2回繰り返されているように見える。図は循環過程をグラフにしたものである。これをみると、まず2012年末から2015年にかけて一巡し、その後、2016年から2019年初にかけて再び一巡している。その動きはややぎくしゃくしているものの、概ね循環過程を辿ってきたといえるのではないかと。わが国では、サービス経済化の進展で経済全体に占める製造業のウェイトが低下していることや、IT活用等による在庫管理技術の向上などにより在庫変動自体が小さくなってきていることに留意する必要があるが、前回の停滞時期同様に今回も一時的な停滞で終わるのか注目される。

（商工総合研究所主任研究員 赤松健治）



（資料）経済産業省「鉱工業指数」
（注）鉱工業出荷、鉱工業在庫は前年同期比（%）